

子宮がん検診（車検診）

動 向

検診車による子宮がん検診は、昭和43年度から神奈川県の実施事業として開始され、昭和47年度から横浜市より委託が加入された。また、老人保健法施行に伴い、昭和58年度から実施主体が神奈川県より市町村に移行し、今日に至っている。

検診内容は、診察・子宮頸部からの細胞採取であり、横浜市立大学、日本医科大学、北里大学、東海大学、聖マリアンナ医科大学の各医学部産婦人科医師が担当し、当協会では細胞診断と検査成績の作成・通知・追跡管理等行っている。

検診の内容、ならびに精度管理については、「子宮がん車検診実施検討会」（構成メンバーは上記各大学及び県立がんセンター、事務局は当協会）において検討されている。

結 果

2000年度の車検診受診者数は35,256名（初診は9%）、50歳未満の若年層31%、50歳以上の高齢層69%である。再診高齢層が多く（67%）、再診若年層、初診若年層の順である。

発見されたがんは27名、頸がん24名と体がん3名からなり、発見率は、0.07%、高齢層0.05%に比し、若年層が0.14%と2.8倍高く（図A）、再診0.05%に比し、初診が0.35%と7倍高い。

頸がんは24名、全例、扁平上皮がん、進行がん2名（Ⅱa期、Ⅱb期）に対し、早期がん（O期、Ⅰa期）が22名と高率（92%）に検出されている。

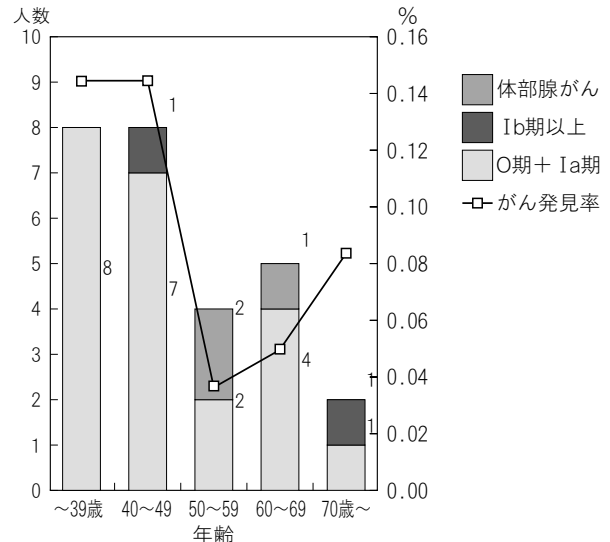
一方、体がんは3名、全例、50歳代で、Ⅰ期2名、Ⅲ期1名である。

発見された異形成は83名（軽度、43名、中等度、24名、高度、16名）である。異形成発見率は0.26%、初診と若年層がそれぞれ0.47%、0.42%と高い。

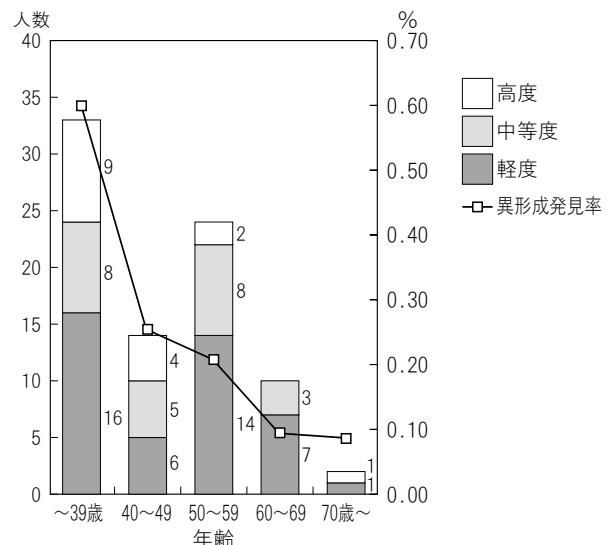
年齢階級別対受診者％表示（図B）では、39歳以下が最も高率（0.6%）、しかも全高度異形成の81%を占めるなど、特徴的な変化を呈し、以後、年齢階級進行に伴って下降してゆく現象が観察される。

以上のがん、異形成を誘導した頸部細胞診クラス

図A 年齢階級別がん確定病期別実数及び発見率



図B 年齢階級別異形成実数及び発見率



別細胞診断状況は、クラスⅡ要再検7.4%、Ⅲa61.4%、Ⅲb84.6%、Ⅳ75%、Ⅴ93%である。

ま と め

子宮がん検診（車検診）のがん発見率は、初診ならびに若年層、両者に高率である。いかにして両者を車検診において増加させてゆくか、難しい課題であるが、県民の健康を守ることを目的に、我々は努力、前進してゆかねばならない。

関係の集計表は116～118頁に掲載